

VII. 協同的探究学習を用いたサイエンス・リテラシーの育成

doi: 10.18999/bulsea.66.53

第1章

協同的探究学習を用いた授業実践の概要

今村 敦 司

(1) 仮説

協同的探究学習は、生徒一人一人が自分で答えを形成するための支援ができる学習法で、東京大学大学院教育学研究科藤村宣之教授が提唱するものである。すべての教科や課題探究にも適用でき、生徒の自己肯定感や仲間作りにも役立つため、様々な場面でこの手法による授業を展開できる。本校でも既存の教科とSS課題研究に「協同的探究学習」を取り入れることで、現代的な課題の本質について、他者と協同しながら主体的に探究し続ける生徒を育成できるという仮説を立てた。

理解・思考型学習である協同的探究学習は「わかる学力」(=様々な概念を理解する力)を育成するのに適した方法である。課題研究にも取り入れることで、因果関係を自分の言葉で説明する力や、課題の本質を理解し、多元的・長期的に考える力を育成できる。実技系教科も含めた既存教科で身につけた各教科の「わかる学力」と、SS課題研究の中で身につけた教科横断型の「わかる学力」の相乗効果により、主体的な学びへと生徒が変化し、理解・思考・表現力が高まると考えた。

(2) 実践

協同的探究学習の各授業に於いて共通する段階を次に示す。

- ①非定型問題(導入問題)による既有知識の活性化
↓・身近ではあるけれども、答えが一つに限らない問題に取り組んでみる。
- ②個別探究による自己説明
↓・自分なりの考えをノートに書く。特に理由が大切。
↓・別の解き方や考え方がないか考えてみる。
- ③協同探究による知識統合
↓・多様な考えをクラスで発表する。聴くことも重要。
↓・考えの間の共通点、違い、つながりを考えてみる。
- ④再度の個別探究による理解の深化
・友だちの考えも生かしながら展開問題に取り組む。

様々な教科の授業や課題探究の授業時のどのような場面でこの学習法を取り入れることができるか、藤村先生のアドバイスを基に、10月の研究会に向けた各教科の実践をとおして研究を重ねてきた。

(3) 評価

今年度の協同的探究学習による授業実践は、コロナ禍で藤村先生の定期的な観察ができない中、試行錯誤を繰り返しながら実践された。話し合いの授業はコロナ禍では配慮が必要であり、実践には慎重さが求められた上に、長期間の休校により授業時間が削減され、取り組みの回数も少なくせざるを得ない状況の中ではあったが、生徒につかませたい概念理解と本質をおろそかにできないため、各実践を試みた先生方は苦労が多い年度であった。詳しい内容はこの後の個々の実践で報告するが、今後とも協同的探究学習の適応できる教科、分野を広げるとともに、オンラインでも実施できる手法についても研究する必要があるという課題もでてきた。

(文責 今村敦司)